

共同研究 ● エージェンシーの定立と作用—コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望

エージェンシーとコミュニケーション

人間の生活は、非一人間存在を含むエージェンシーを前提に営まれている。ここでいうエージェンシーとは、強いリアリティーをもち、対物的に作用する様々な存在のことである。モノ、技術、動物、土地、財物、精霊、神、愛、思い、常識など、エージェンシーの具体例をあげると、きりがない。本共同研究の目的は、こうしたエージェンシーがわたしたちの生活に立ち現れる状況をコミュニケーションとの関係で考察することにある。

エージェンシーの定立をコミュニケーションとの関係で考えることの意義のひとつは、文化を過度に重視してきた研究の対象化と相対化である。文化は人々に共有される概念の複合体であり、それを知ること、人間の生活を過不足なく理解できるという前提のもとに研究がおこなわれてきた。しかし、ある概念がたとえ規範や理念として知られていても、人間の生活は、その概念に従って営まれているとはかぎらない。

常識について考えてみよう。法に触れないわたしたちの言動は、常識に従っておこなわれることになっている。そして実際にも、電車やバス内における、どのようなふるまいが迷惑行為にあたり、あたらないかを、わたしたちは直観的にはよく知っている。しかし、ある乗客の言動を常識はずれの迷惑行為として戒めたり、止めさせたりすることができるだろうか。あえてそうする場合もあるだろう。しかし、押し問答になったとき、わたしたちの常識は効力をもちないどころか、わたしたちは常識の何たるかを説得力ある言葉で表現するこ

とすらできないことが明らかになる。

その一方で、友人や仲間のあいだでなら、何が常識であるかは自明であり、わたしたちのふるまいは常識に従っておこなわれているように感じられる。この違いは、友人や仲間のあいだで交わされる高い密度のコミュニケーションのなかで、何がおこなわれ、何がおこなわれるべきではないかが、繰り返しチェックされ、明確に限定されていることに由来する。そこから大きな逸脱を繰り返す者は、友人や仲間であり続けることはできないだろう。

これらのことを総合すると、常識は、行為に先立って存在し、わたしたちの言動を規制している法律のような規則ではなく、ふるまいの適切さが繰り返しチェックされるコミュニケーションのなかで行為を規定しているかのように立ち現れるエージェンシーなのである。

東北タイのピットクラブーン

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの表裏一体的な関係を民族誌的データにもとづいて考察している。その一例として、2016年1月30日(土)に開催した研究会における津村文彦(名城大学)による発表を紹介したい。

津村の発表は東北タイのピットクラブーンに関するものだった。ピットクラブーンとは出産後の女性によく見られる頭痛、腹痛、脚の痛み、めまい、咳が出る、吐き気、母乳不振、出産時に生じた傷の回復の遅れなどの症状のことである。

その原因は食物と関連づけて語られる場合が多いが、次の①～⑤などのように様々である。①無性に食わなくなったものを食べてしまった。②産後、食物禁忌をとまなうユーファイという儀礼をおこなわなかった。③身体に毒が入った。④精霊が憑依した。⑤四大元素(火水風土)のうちの水が不足。

ここでは省略するが、ピットクラブーンの原因は他にもある。こうした原因の多様さの背景には、産婆と村人、葉草師と村人、呪医と村人、医師と村人のあいだで、異なる病因の存在を前提とするコミュニケーションがおこなわれていることによる。すなわち、産婆とのあいだでは①や②が、呪医とのあいだでは③や④が、葉草師とのあいだでは⑤がピットクラブーンを引き起こすエージェンシー



祖先に供犠された動物の肝臓には祖先の「思い」が現れる。呪医が左手に肝臓をもちながら、子が授けられない悩みを抱え、供犠のために村を訪れた夫婦に祖先の「思い」を伝えている。(インドネシア・フローレス島中部、2015年7月19日、杉島敬志撮影)。

(病因)とされ、それぞれに異なる治療がおこなわれる。そのため、村人たちは、速やかに症状を軽減してくれる治療を求めて、異なるコミュニケーションへの出入りを繰り返すことになる。

ただし、現在では病院で処方される薬に強い効能が認められている。このことは病院出産が一般化し、ピットクラブをめぐりコミュニケーションの相当部分が医師を中心とするコミュニケーションと重なるようになったことと関係があると思われる。また、近代医療関係者のあいだで、ピットクラブは迷信とされるが、単なる迷信として否定されるのではなく、対処療法によって治療されるべき、多様な症状の総称と見なされる。

このことは、異なる病因を定立するコミュニケーションの中心にいる呪医、薬草師、産婆などの権威者が、それぞれのコミュニケーションを閉ざすことなく、その外部との関係を開放状態に保っていることを示している。このことが村人たちのピットクラブをめぐり異なるコミュニケーションへの出入りをいっそう容易にするとともに、多様なコミュニケーションが並存し、潜在的には増加する状況を生み出していると考えられる。



ビールを飲むジャガー

人間の生活が一枚岩的なコミュニケーションに覆われることはありえない。人間の生活は異なるエージェンシーを定立するコミュニケーションの並存から成るとしても過言ではなく、それらは並存するだけでなく、対立する関係にあることも多い。本稿では、わずかな具体例しかあげることができなかったが、このことを示す具体例は豊富にある(杉島編 2014 参照)。

近年、ヴィヴェイロス・デ・カストロによる南アメリカ先住民の研究が大きな注目を集めている。この研究でスローガニックにのべられるのは、われわれ人間が血とよぶものはジャガーにとってはビールであり、われわれにとって腐肉にわく虫であるものはハゲワシにとっては焼き魚であり、われわれが泥沼と見なすものはバクにとって立派な儀礼の場であるといった、異なるパースペクティブが並存する状況である。このように世界がパースペクティブの多様性から成るという考えを、ヴィヴェイロス・デ・カストロは「パースペクティブ主義」とよんでいる。また、ヴィヴェイロス・デ・カストロは、パースペクティブ主義には人間にとっては血と見なされ、ジャガーにとってはビールとして認識されるような確固とした実体Xがあるわけではなく、血とビールは境を接しており、ビールには血、血にはビールという「裏側の味」があるような世界観を「多自然主義」と名付けている(ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2015: 43-80)。

本共同研究が目指すところはヴィヴェイロス・デ・カストロの研究と大きく重なりあっているように見えるかもしれない。だが、両者は大きく異なる。パースペクティブ主義や多自然主義は、結局のところシャーマニズムであり、ジャガー、ハゲワシ、バクになりかわって世界を眺めたシャーマンの経験にもとづく語り由来する(ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2015: 52)。換言すると、ここでいうジャガー、ハゲワシ、バク(や彼らのパースペクティブ)はシャーマンを中心に展開されるコミュニケーションのなかで定立されるエージェンシーなのである。

だが、シャーマニズムの外側にはシャーマンの語りを否定するコミュニケーションが広がっているはずであり、両者のあいだには鋭い対立関係があるかもしれない。また、こうした関係のなかで、対立する陣営が自らの奉じる概念(理論)を先鋭化させたり、大きく変節させることもあるだろう。このようにいべながら、筆者が思い浮かべているのは、少なからぬ数の日本人が、日本文化といわれるものの諸側面を様々な理由から肯定あるいは否定し、その保持と消滅をはかるために対立や議論を重ねてきた膨大なコミュニケーションの歴史である。

ヴィヴェイロス・デ・カストロの研究が抱える難点は、こうしたコミュニケーションが並存・対立する歴史状況に適切な配慮をおこなっていないことにある。この点で、それは概念に焦点を当てた無時間的な研究であり、文化の概念を前提とする従来の人類学研究や、文化相対主義と区別がつかないのである。本共同研究は、並存・対立するコミュニケーションの複雑で変化する状況に関心をむけることで、人間の生活を文化に還元して語ることの不十分さを明らかにするとともに、その延長上で人類学とりわけその民族誌研究の方向性を刷新することができるだろう。

【参考文献】

- 杉島敬志編 2014『複ゲーム状況の人類学—東南アジアにおける構想と実践』風響社。
- ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド 2015『食人の形而上学—ポスト構造主義人類学への道』檜垣立哉・山崎吾郎訳、洛北出版。

すぎしま たかし

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。専門は人類学。編著書・論文に「複ゲーム状況の人類学—東南アジアにおける構想と実践」(風響社 2014 年)、「複ゲーム状況について—人類学のひとつの可能な方途を考える」(『社会人類学年報』34: 1-23 2008 年)など。